ironical pink

柳　すすたけ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ｉｒｏｎｉｃａｌ　ｐｉｎｋ

【Ｎコード】
Ｎ５９０４Ｔ

【作者名】
柳　すすたけ

【あらすじ】
ブライダルフォトショップ『ｃｏｌｏｒｆｕｌ　ｄｒｏｐｓ』に営業として勤務する上野カズコは、親子ほどに年の離れた男性と付き合っていた。
しかし最近はお互いの仕事が忙しくてすれ違いの日々が続いていた。
そんなある日、出向したホテルで行われたブライダルフェアで女性と一緒にいる彼氏を目撃してしまい…。
Ｃｏｌｏｒｆｕｌ　Ｄｒｏｐｓ　シリーズ第３弾。

大人の恋愛をテーマにしているので、R指定描写が少しだけ入ります。ご了承くださいませ。

▼パールピンク▼

「うん大丈夫、マサヒコさんを煩わせたりしないわ」

携帯電話の電源ボタンを押して通話を終了した上野カズコは意気消沈していた。

真っ直ぐ切りそろえられた前髪にミディアムロングのボブカット。亜麻色に染められた髪の毛とぽってりとしたメイクはまるで流行のガーリースタイル。

背は低いが出るところは出ている女の子を象徴したような体型。流行に合わせて髪型やメイクを微妙に変えるのは彼女にとって当たり前の嗜みだ。

見た目とトークの華やかさで、彼女は誰とでも打ち解けることの出来る才能を持っている彼女は、『ｃｏｌｏｒｆｕｌ ｄｒｏｐｓ』に営業として勤めている。

「はぁ～」とため息をこぼした時、専属カメラマンの梶間ユキコと桜庭リサが更衣室に入ってきた。

「あれ、お疲れ様です。カズコさんデートって言ってませんでした？」

「カズコがお洒落してこんな時間までいるなんてめずらしいね」

「お疲れさま～、残業が入ったとかでドタキャンされちゃった」

「え？…あの、なんか、すみません」

「今の彼氏って仕事なんだっけ？」

「証券会社の海外事業部」

彼女には、親子ほどにも年の離れた相手がいる。が、その事実を知っているのは親友のユキコだけだった。

結婚に並々ならぬ理想を掲げる彼女が付き合う男性は、必ずと言っ

ていいほど年上のエリートだった。

「ふぅん」

ユキコはあまり興味なさそうに返事をして、自分のロッカーを空けて着替え始めた。
黒のベストと白いワイシャツの第3ボタンまで外すと、二つを一気に脱衣する。そのままハンガーにかけてしまう豪快な着替え方は後輩であるリサも一緒だ。
その姿をみて少々呆れ気味にカズコは言う。

「ねぇ、カメラマンて皆そんな風なの？」
「どうだろう？時間に追われてるからかも、ねぇリサ？」
「えぇ！？…まぁ、そうかもしれない…ですね」

キャミソールにパーカーを羽織って黒のスラックスを脱ぎ始めていた彼女が、片足を宙に上げたまま硬直する。
リサは背が高く細い上にボーイッシュな格好を好むので、宝塚の男役の様な印象だ。

「リサ、早く穿くか脱ぐかしなよ」
「おぉう、すみません」

いきなり先輩から話を振られたリサはなんとも間抜けな格好でいた自分に気付き、素の言葉が出つつもそそくさと着替えを再開した。

「で？トオルとは最近どうなのよ？」
「どうって、何がですか？」
「だから、どこまで進んでるの？」
「ちょ…はぁぁ！！？」

「狼狽するとは怪しいなぁ」
「カズコ、さっきの意趣返し？それ」
「まあね、で、どうなの？」

赤面したリサはロールアップデニムとコンバースのハイカットスニーカーをはいて荷物を背負うと「お先に失礼します」と出て行った。

「からかい過ぎたかしら？」
「でしょうね」
「ねぇユキ、今夜、一杯つきあってよ」
「しょうがないね、付き合ってやるか」
「ありがと」

◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇

「で？実際今の彼氏とはどうなの？」

居酒屋に移動して、ビールとお通しがくるなりユキコが心配そうに聞いてきた。

「最近はお互いの休みが一致しなくて、昼間に会えたことはないの」
「そう」
「夜も一晩一緒にいることがなくなってさ…もう飽きられたのかなぁ」

カズコは言葉を吐き出すとビールを一口煽る。

「結婚しようなんて言われてたけど、違うのかな？」
「ただ本当に忙しいだけじゃないの？前にもあったでしょうがこんなこと」
「うん、そうだね」
「それに、お金持ってて優しくて紳士な人と結婚するのはアンタの理想なんでしょ？」
「うん」
「そのために婚活までして今の彼氏獲得したんでしょ？」
「うん」
「だったらつべこべ言わずに理想に向かって努力しなさい」
「はぁい」

カズコはユキコの説教に可愛らしく返事をすると、テーブルの端に立てられたメニューに手を伸ばす。

「ねぇ、何食べたい？」
「茄子の一本漬け」
「ユキは渋好みだねぇ」
「いいでしょ、別に」
「チヂミなんかどう？」
「ケンカ売ってる？」
「べっつにー。ただ、韓国人のダンナさまが羨ましいだけ」
「そんなことないよ。向こうは儒教の国だからね、色々ありますわ」
「今度会わせてよ」
「機会があったらね」
「絶対よ～」

テーブルに身を乗り出して約束を取り付けようとした時、自分のすぐ横で振動があった。彼が似合うといってくれた、パールピンクの

携帯電話が着信を知らせていた。
携帯電話のサブディスプレイを確認すると、そこにはマサヒコの名前があった。

「もしもし？」
『あぁ、こんな時間にごめんね』
「ううん大丈夫」
『カズコさえ良かったら、今から会えないかな？』
「ホント？」
『あぁ、最近忙しくて中々会えなかっただろ？だから明日一日、僕にくれないか？』
「覚えててくれたの？」
『次に休みが取れるなら絶対あわせようと思ってね。いいかな？』
「もちろん」

先ほどまでのトーンとは違う、甘く恋人に蕩けるような声。正面でそれを見ているユキコは笑いを堪えるのに必死だ。
そんなユキコの様子に、カズコは人差し指でシーッと合図を送る。

『じゃぁいつものホテルで待ってるから』
「今すぐ行くわ」

通話を終えて携帯電話が畳まれると、ユキコはたまらず噴出した。

「いや～見事な猫かぶりだね」
「失礼ね、彼はこういう甘い女の子が好きなの」
「ま、キャラから遠く外れてはいないけど、しんどくないの？」
「彼のためならいいの」
「ふうん、ご馳走様」

そういって伝票を持ってユキコは右手を払う。

「私ご飯食べて帰るから早く行きなよ」

「え？でも」

「ビール一杯ぐらいでケチくさい事言わないから」

「本当にごめん、ありがとう」

「じゃ、いい夜を」

手早く荷物をまとめると、カズコは出来る友人に感謝しつつ居酒屋を後にした。

▼ネオンピンク▼（前書き）

冒頭に直接的な表現はありませんが、絡みのシーンがあります。
ご注意ください。

▼ネオンピンク▼

「あっ…あぁ…ぁぁぁぁぁぁ！！」

快感の渦に呑まれて目の前が一瞬白く塗りつぶされる。

「…はぁ…はぁ…」

全速力で走った後のように息が上がるが、纏う倦怠感は心地よい。マサヒコはカズコを抱きしめる。

「好きだよ、カズコ」

「…愛してるわ、マサヒコさん」

しばらく大人しくされるがままになっていたカズコだが、抱きしめ返したくてそろそろと手を背中に回そうとすると、とたんに放された。

そのままマサヒコはバスルームに消えてしまう。その背中を寂しそうにカズコは見送る。

「最近、抱きしめさせて貰えないね」

それはやんわりと拒絶を表しているように思えた。こういう時のオンナの勘が当たることをカズコが知っていた。

「今回もダメかなぁ」

ため息を一つ零して、そのままシーツに蹲って安寧な闇へと意識を落とした。

◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇

頬を優しく撫でられる感触で、ふ、と意識が浮上する。目の前には、紺色のパジャマが見える。

「起こしてしまったかな？」

少しガラッとしたバリトンボイスが頭の上から降ってくる。顔を上げると、日に良く焼けた顔があった。
ほどよく引き締まったな身体と顔全体と比較してやや大きな目が、４０代後半とは思えない若さを演出している。

「大丈夫、今何時ですか？」
「もうすぐ6時ってところかな。起きるかい？」
「えぇ、今日はどこか出かけるんですよね？」
「そう。君とショッピングなんてどうかと思ってね」

いたずらっぽく笑うマサヒコに、カズコはクスリと笑う。

「なら早起きして飛びっきりのおしゃれがしたいです」
「そうと決まればいつまでも抱きしめてる訳にはいかないか」

カズコの背中に回していた腕を解くと、マサヒコはベッドから抜け出す。ベッドサイドの電話でフロントへ連絡を入れる。いつも通り、モーニングを部屋でとるためだろう。

いつもと変わらない朝。だが、やはり昨日抱きしめることを拒絶された不安が拭えない。

「どうしたんだい？」

「え？あ、いいえ、マサヒコさんのスレンダーな身体に見とれてました」

「可愛いね」

右手でカズコの左頬を撫でる。それはまるで、恋人にする愛撫ではなく、ペットにする愛情表現のようだ。

そう思った瞬間、カズコの中の不安が益々大きくなった。

◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇

「ここですか？」

「あぁ、そうだよ」

思わず入り口で足を止めて外装を見上げる。銀座のブランドが立ち並ぶ通りの一角にある宝飾店に二人は来ていた。

「本田様、いらっしゃいませ」

「しばらくぶりだね、佐々木くんはいるかい？」

「少々お待ちくださいませ」

仕事でしばしば高価な宝飾は目にするが、こういった最高クラスの宝飾店に入るのは仕事でもプライベートでもカズコには無い経験だ

った。
引け腰になりながらもマサヒコに続いて店内に足を踏み入れると、一目見て高級だとわかるパンツスーツに身を包んだ店員が近寄ってきた。
どうやらマサヒコはここに何度も来ているようだった。

「本田様、お久しぶりです」
「佐々木くんも。移動していなくてよかったよ」
「本日はどういった物をお探しですか？」
「彼女に似合うリングを探したいんだが」
「ご用途は？」
「彼女に似合って普段からつけられる、シンプルなものを」
「畏まりました。失礼ですが、お客様はどういったお仕事をされていらっしゃいますか？」
「え？私ですか？えと、ブライダルフォトを取り扱うお店で接客してます」
「そうですか。ご要望の色はございますか？」
「ピンク系が好きです」
「畏まりました」

用途を聞かれた時に、マサヒコは直接の答えを言わなかったが佐々木には伝わったらしい。いくつかカズコに質問した後、一礼して二人の傍を離れる。
ショーケースのいくつかを周り、リングを選んでいるようだった。
しばらくしてリングを乗せたトレーを持って戻ってきた。

「こういったデザインはいかがですか？」

トレーに乗せられたものは全部で7つ。そのうちいくつかは、明らかにエンゲージリングを連想させるデザインだった。

そして、全てのリングにダイアモンドがついている。昨日から感じている不安はただの思い過ごしなのだろうかと、カズコは一人心に思う。

「サイズのお直しは可能ですのでお気に入りを見つけてください」
「ありがとうございます」

7つのリングのうち、1つのリングのデザインに目が留まる。ピンクゴールドとプラチナの土台がクロスして連なり、その交差した部分に石がついている。石の配置が桜をイメージさせた。5枚の花びらのように配置された石のうち、一つが艶(あでやか)やかなピンク色をしている。

「この石はなんですか？」
「それはスピネルといって、昔はルビーと混同されていた石です。そちらに使われているのは、最高級のピンクスピネルでお色はネオンピンクですね」
「へぇ～、きれい」
「気に入ったかい？」
「えぇ、とても素敵」
「ならこれにしようか」
「畏まりました、ではサイズを確認させていただきますね」

そういって佐々木は恭しくカズコの左手を持ち上げると、胸ポケットから小さなメジャーを取り出し薬指に巻きつける。

「わぁ、細くて綺麗な指なんですね。7号ですね」
「いつもサイズがなくて苦労してるんです」
「そうなんですか。ついでに他の指も測りますか？」
「いいんですか？」

「かまいませんよ」

そういって佐々木は結局全ての指のサイズを測った。

「ではお直しに2週間お時間いただきます」

「あぁ、かまわないよ」

「ではこちらの受け取り票に記入をお願いします」

「わかった」

マサヒコは渡された書類に必要事項を記入していく。その間、カズコは近くのショーウィンドウを覗く。

「あ、このピンキーリング可愛い」

「気になる商品ございますか？」

「いえ、連れを待ってる間に見ているだけなので」

「そうですか。どうぞごゆっくりご覧くださいませ」

同じくらいの年頃の店員に声をかけられ、カズコは慌てる。確かに気になった商品はあるが、彼女の給料ではとても買える値段ではないため、試着も躊躇われた。

「では、支払いはこれで頼むよ」

「お預かりいたします」

記入が終わったマサヒコの声が聞こえたので、カズコはそちらに振り返る。彼が黒い長財布から取り出したのはアメックスのゴールドカードだった。

話に聞いてが始めてみるそれに、カズコは目のやり場に困った。あまりジロジロ見るのは失礼だと思ったからだ。

「お待たせいたしました。こちらお返しいたします」
「じゃぁ、よろしく頼むよ」
「お任せくださいませ」

丁寧にお辞儀をした佐々木は、そのまま二人の前に立ち入口まで案内しドアを開ける。そこでもまた丁寧にお辞儀をして二人を見送った。
そんな接客を受けたことのないカズコには少しくすぐったかった。

「マサヒコさん」
「ん？」
「ありがとう」
「どういたしまして」

カズコは先ほど見た、ネオンピンクのスピネルとダイアモンドで出来た桜を思い出して心が高揚するのを感じた。

▼ブーゲンビリア▼

マサヒコとリングを見にいった翌日、カズコはチーフに呼び出された。

「次のブライダルフェアへ出向ですか？」
「えぇ。突然で申しわけ無いけれど、事前準備や打ち合わせもあるから期間は明後日から2週間よ」
「外務の人じゃダメなんですか？」
「今回はうちのブースを作ってもらって、実際に相談や見積もりをすることになったのよ」
「そうなんですか」
「悪いんだけど相田さんと二人でお願いできるかしら？」
「かまいませんが、私がお預かりしているお客様はどうしますか？」
「遠山に引き継いでもらえるかしら？」
「わかりました」

遠山アイコは営業の中でも内務、つまり接客の責任者だ。この店に就職したばかりのカズコに、接客のイロハからコーディネートセンスまで教え込んだのはアイコだ。
彼女に任せておけば問題は何も無い。

「アイコさん、いいですか？」
「どうぞ」
「チーフからの辞令で、次のブライダルフェアへ出向が決まったので、明後日から引継ぎをお願いします」
「了解」

アイコは責任者になった時から裏方に回ることが多くなった。お客様へのお茶の準備や、ドレスの試着の補助、時には他の接客係のフォローもこなす。

「はじめのお客様は？」
「鈴木様と松崎様です」
「このお客様？」
「そうです」

ラックにあるカズコの担当しているファイルから該当する資料を取り出す。

「ブーゲンビリアって発注したの？」
「はい。当日には届きますが」
「了解。確認しておくわ」
「お願いします」
「悪いんだけど、出向期間中に来るお客様のリストを出して、その全てのお客様に今日中に電話してくれる？」
「わかりました」

通常の写真館と違い『ｃｏｌｏｒｆｕｌ　ｄｒｏｐｓ』は、ブライダルフォト専門店なので１日に訪れる客の数は少ない。が、その分親身になって最高の一日を作り上げることを社訓にしている。そのため少数精鋭のスタッフたちは常に走り回っている状態だが、営業チームだけは違った。
一組にかける時間が長いので、営業チームの人数は多い。特に内勤で接客を担当する人数が一番多く、上手く回せば二人デスクワークになっても問題は無い。

「よし、がんばるぞ」

◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇

その三日後、予定通りにカズコは業務提携しているホテルに出向した。準備は順調に進み何の問題も無く進んだ。
その間にマサヒコからの連絡は一切なく、カズコは不安に駆られた。が、なんどもその不安を打ち消した。「きっとリングのことがあるから驚かそうと思ってるのよ」と。
しかしこんなに長くメールも電話も無かったことは初めてで、言い知れぬ澱が心に溜まっていった。

ブライダルフェア最終日。専用に設けられたブースで結婚を控えたカップルを相手に相談や見積もり、案内業務をこなしていた。さまざまな不安や期待を胸にブースを訪れるカップルは、誰もが皆幸せそうに見える。
フェアの最終日にもなると、最初は慣れない環境での仕事に多少の緊張をしていたカズコも落ち着いて持ち前の明るくしっかりとした接客をしていた。

「お疲れ様」
「あ、オーナー。お疲れ様です」

人の流れも一段落したお昼過ぎ、オーナーの色麻ノブユキ（しかまのぶゆき）が声をかけてきた。

「これ差し入れだって」
「わぁ、ありがとうございます」
差し出されたコンビニの袋を覗き込むと、中には缶コーヒーと固形の栄養補助食品が入っていた。
メープル味のそれを取り出すと、早速口に頬張る。

「初日と昨日は休む暇もなかっただろう？ごめんね」
「いえ。普段と違う接客なので楽しいですよ」
「そういってくれると助かる。なにせ外勤の俺たちじゃ、実際のスタジオ撮影の雰囲気を上手く伝えられないからね」
「そんなこと無いと思いますけど」
「いや、アカネに怒られた。スタジオ撮影を知らない人間が何のアドバイスが出来るんだってね」
そう言って苦笑するノブユキを見て、カズコもつられて笑う。

「チーフのアイディアだったんですか」
「そう、俺はあいつに頭が上がらないからね」
「なんでですか？」
「俺が嫌がるあいつに土下座して結婚してくれって頼んだんだ」
「うそぉ！！オーナーそんなことしたんですか？信じられない」
衝撃の発言にカズコは目を丸くして手に持っていた缶コーヒーを危うく落としそうになる。

「はは、皆には内緒にしてくれよ？」
「えぇー！せっかくの話題なのに無理ですよ」

カズコは可愛らしく唇を尖らせ抗議してみせる。年よりもずっと幼く、そして可愛らしく見える仕草だ。大体の異性は、カズコのこの仕草に惑わされる。
が、ノブユキには通じないらしい。

「まったく。そういう仕草は彼氏にしてやれ」
「やっぱり通じませんね」

「残念」と口にしながら、カズコは後片付けを始める。そろそろ戻らないと、もう一人、カズコと出向しているホナミの機嫌を損ねるだろう。
ノブユキはそのままホテルの企画部と打ち合わせがあるとかで席を立った。カズコはゴミを片付けながら、アカネのことを少し羨ましく思った。
「やっぱり私の理想の結婚は難しいのかな？」そんな事を考えながらバックヤードからブライダルフェアの会場に戻るためドアを開けた。
まさにそのとき。

「うそ」

ドアを開けた廊下に、見知らぬキャリアウーマン風の女性と並び自分には見せたことも無いような艶やかな笑みを浮かべゆったりと歩く、マサユキの姿があった。
女性の手には、先日アイコに引き継いだクライアントが希望したブーゲンビリアの鉢があり、それがやけに目に焼きついた。

◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇

「ちょっと大丈夫？顔が真っ青よ？」

その後どうやってブースに戻ったのかカズコには曖昧だった。とにかく戻って仕事をしなければ。その一心で歩いていたようにも思える。

ホナミに促されてパイプ椅子に座る。

「大丈夫。ちょっと驚いただけ」

「ならいいけれど…」

「何に？」とはホナミは聞いてこなかった。彼女なりの気遣いなのだろう。

「とにかく、お客様の前でそんな表情しないでよ。出来ないならバックヤードに戻って休んでいいから」

「ありがとう。本当に大丈夫だから」

その後、カズコは得意の営業スマイルで数々の客の相談や見積もりをこなした。そのうちのいくつかはその場で契約となった。気がつけば最後のカップルを送り出したところだった。

「お疲れ様」

「あ。お疲れ様」

「カズコ、よくがんばったね」

「ありがとう」

ホナミが励ますようにカズコの右肩を叩く。その気遣いが嬉しくて、

カズコは目に涙を溜める。

「ちょっと、今泣かれたら私が泣かせたみたいじゃない」

「ごめん」

「も～しょうがないな」

呆れたように笑うと、ホナミはカズコにハンドタオルを渡す。

「とりあえずチラシやポップ片付けてくるから、オーナーが来るまで好きなだけ泣いてなさい」

「ごめん」

「そういう時はありがとうお姉さまって言って」

おどけた様に口にするホナミは右手をヒラヒラと振りながらパイプ椅子から立ち上がり、テーブルに並べられたチラシを一まとめにすると、次に会場に配置されたポップを回収しにブースを出て行った。涙が収まるまでハンドタオルを両目に当てて身じろぎ一つせずにいると、ジャケットのポケットから振動が伝わった。携帯電話を取り出すと、マサヒコからの着信だった。

「……」

出ようか出まいか逡巡した後、留守番電話になる直前に通話ボタンを押す。

「はい」

『仕事中だったかな？』

「今終わったところです」

『そうか。突然で悪いんだが、今夜会えないかな？』

「今夜ですか？」

『あぁ、忙しいようなら明日以降でかまわないが』
「いえ、大丈夫です」
『そうか。なら21時にいつものホテルでいいかい？』
「わかりました」

一方的にかかってきた電話は一方的に切れてしまった。まるで今のマサヒコの心を代弁しているかのようだった。

▼ピンクゴールド▼

ブースの撤収作業を終えて店に戻ると、１９時をまわっていた。
カズコは言いようのないもやもやを抱えながらも、デスクワークを片付けることにして、事務所の自分のデスクに向かった。
しばらくしてアイコが表から戻ってきて、カズコのデスクに近付いてきた。

「カズコ、ホテルで様子がおかしかったって聞いていたけど、大丈夫なの？」
「アイコさん…ご心配おかけしました。大丈夫です」
「何があったか聞かないけど、無理しちゃダメよ？私たちが辛い顔していたらお客様の幸せを祝えないでしょ？」
「はい」
「そうだ。ちょっと待ってて」

何か思いついたようにアイコは自分のデスクに向かい、可愛らしい缶を手にして戻ってきた。

「これ、ブーゲンビリアの花束使ったお客様から、あなたに」
「私に？」
「そう。相談から衣装合わせまですごくお世話になったからって、わざわざあなたに持って来てくださったの」
「これ…」
「ハワイのお土産らしいんだけど。この花、よっぽどお二人の思い出の花なのね」
「…そう…ですね」

アイコから渡された平べったい円柱の缶には、『Ｓｗｅｅｔ　Ｓｔｒａｗｂｅｒｒｙ　Ｃａｎｄｙ』の文字とブーゲンビリアのイラスト。
それは、カズコにホテルで見た光景を思い出させるには十分だった。

「ねぇ、本当に大丈夫？」
「あ、はい。大丈夫です」

缶を見つめたまま硬直したカズコを見て、アイコは心配そうに覗き込む。無理やりに笑顔を浮かべたカズコは、アイコに尋ねる。

「アイコ先輩、彼氏が知らない女性と歩いてる現場見たらどうします？」
「う～ん。とりあえず、ストレートに聞いてみるかな」
「強いですね、先輩は」
「そんなことないわよ。ダンナとはしょっちゅう些細なことでケンカしてるし」
「たとえば？」
「ご飯炊き忘れたり、ゴミ出し忘れたりした時もすごいし、この前なんかカレーとシチューで大喧嘩しちゃったし」

指折数えながら言うアイコに、カズコは苦笑する。

「先輩の家は万年新婚夫婦でしたっけ」
「なんで皆そんなこと言うのかしら。不思議でしょうがないわ」
「いや、十分な証拠だと思いますけど」

両腰に手を当て真剣に言うアイコを見て、今度こそカズコは笑顔を浮かべる。

「やっと笑ったわね」
「え？」
「さっきからこの世の終わりみたいな顔してたから、どうしようと思ってたのよ」
「そんな顔してました？」
「そうね、１ヶ月くらい前のリサちゃん位ひどい顔してた」
「呼びました？」

リサが手に白い花束を持って入ってきた。あまりのタイミングのよさに、アイコとカズコは顔を合わせて大笑いする。

「え？なんですか二人とも」
「いえ、噂の力って偉大ねってことよ」
「意味わからんです」
「ちょうどあなたの話をしてたのよ」
「ちょっと！！悪い噂じゃないですよねっ！？」
「さぁ、どうかしら？」
「うへー先輩たちひどい！！」

先輩二人にからかわれ、リサは柳眉を逆立てる。

「ほらほら、そんな顔してると美人が台無しよ」
「アイコさんほど美人じゃねーしカズコさんみたいに可愛くないからいいです。別に」
「『ほど』ってことは美人だとは思ってるの？」
「揚げ足取らないでくださいよぉ」

アイコに口で勝てないと知ったリサはがっくりと脱力して項垂れる。手に持ったままの花束がカサリと音をたててリサの膝に当たった。それは真っ白いダリアとヒマワリで作られたブーケだ。

「リサ、その花束どうするの？」
「これは今日の撮影で使ったヤツなんですけど、新婦が荷物になるからって置いて行っちゃったんでどうしようかってことになって…」
「そうなの」
「ダリアとヒマワリとはまた勇気があるブーケね」
「あ～なんでも新婦の好みらしいですけど、やっぱ勇者ですよね。スタジオでも撮影終わってからその話で盛り上がってました」
「あら、カメラマンチームもわかったの？」
「いえいえ。カズサさんが教えてくれました」
「へー。さすがカズサちゃん。で、どうするの？」
「私たちもいらないので、事務所に活けようかってことになったんで持ってきたんです」
「だったら私が貰ってもいいかな？」
「いいですよ」

リサは「はい」とカズコにブーケを渡した。
カズコはじっとリサを見ていた。その目にリサは思わず怯んでしまった。

「な、なんですか？いったい」
「ううん、なんでも。ただ、これも運命かなって」

その瞳には強い煌きが宿っていた。

◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇

待ち合わせの時間より２０分程早くホテルに着いたカズコは、ラウンジでコーヒーを飲んで待つことにした。
店で貰った花束を脇に置いて、携帯電話でしきりに時間を確認する。思ったよりも緊張している自分に気付いたカズコは思わず苦笑いを浮かべた。

「そういえば、自分から振るのってはじめてかも」

今まではずっと相手から別れを切り出されていた。理由はいつも同じ『君は僕の傍だと無理をしているみたいだね』
そう。親子ほども年の離れた相手と付き合うためにずっと無理をしてきた。
ただ守られて甘やかされたいという思いは恋愛ではないと認めてあげる時期かもしれない。そうカズコは思う。

「待たせたね、カズコ」
「いえ大丈夫です」

ラウンジに入ってきたマサヒコの手には、見知らぬ女が持っていたブーゲンビリアがあった。
それを見ても昼間のような動揺は起こらず、自分の心の移り変わりの速さに内心呆れる。が、それを億尾にも出さずカズコは笑顔でマサヒコを迎える。

「今日は何かあったんですか？」
「いや特に何も無いが…コーヒーを飲んでたのか」
「はい。早く着きすぎたので、喉の渇きを潤してました」
「今日は早かったのかい？」
「はい。シーサイドホテルのブライダルフェアに出向してました」

笑顔でそう答えたカズコに対して、マサヒコは一瞬だけ表情を強張らせた。やはり自分が目撃してはいけない現場を見たのだと、カズコは確信する。
一瞬だけ見せた強張りをすぐに笑顔で取り繕うと、マサヒコは自分のビジネスバッグから小さな箱を取り出す。

「この間のリングが出来上がったから渡そうと思ったんだよ」
「うわぁ！ありがとうございます」
「開けてごらん」

差し出された箱は、黒いビロード製で人目で高級だとわかる。おそらく、あの宝飾店では当たり前のものなのだろう。
開けてみると、中には先日見たピンクゴールドとプラチナがクロスしたあの二連リングが鎮座していた。たいした重さもない小さな箱とリングは、カズコの手にずっしりと違う重みを与える。
小さな箱に意識を奪われていたカズコは、マサヒコの言葉を聞き逃してしまった。

「僕がつけてもいいかい？」
「え？」
「君の手に、僕がそのリングを填めてもいいかな？」
「あ、はい。もちろんです」
「じゃぁ貸してごらん」

マサヒコは上機嫌の笑みを浮かべて箱をカズコから受け取り、恭しくリングを持ち上げるとカズコの左手を取った。

「マサヒコさん、その子娘はいったい何なの？」

▼スイートストロベリー▼

呼びなれた名前を聞いたことも無い声が咎めるように呼んでいる。マサヒコの眉間に皺がより、あからさまな侮蔑と怒りで見つめる先を目で追うカズコ。
そこには黒い細身のパンツスーツを着込み、腰まである艶のある濡羽色の髪を振り乱し真っ赤なルージュを引いた唇を歪め怒りに震える女が仁王立ちしていた。
さながら魔女か般若と見まがうその女は、昼間みた見知らぬ女で間違いが無かった。カズコは鉛を付けて重く重く海の底へ沈んでいく様だった。

「いったいなんのお戯れなのかしら？」
「君との見合いは丁重にお断りしたはずですが？」
「たかが一役員が社長である父とその娘の意向を無碍にするなんて許さないわ」
「ですから、私には身の丈に合わない過ぎた待遇だとお断りしたはずだが？」
「あなたは大人しく私（わたくし）の横に立っていればいいのよ」

カズコを無視して始まった修羅場に、傍観者にならざるを得ない。
『そうか、彼女はマサヒコさんの勤める会社の社長令嬢だったのか』
などと思考を現在と遠いところに飛ばして逃げる。
しかし、両者の間に挟まれたカズコは両者の間に漂う張り詰めた空気に否応無く現実に引き戻される。居心地は最悪以外の何でもなく、かといって動くことも出来ない状況に、早く終わればいいと心底思った。
そして一刻も早く自分を解放して欲しい。この場所から。否、この

作り上げた自分から。

「さっさとマサヒコさんから離れなさい。小娘」

それが自分に言われた言葉だと理解するのに、しばしの時間を要したカズコ。やがて自分のことだと気付き、これ幸いと横に移動する。すると乱入してきた見知らぬ女はマサヒコに詰め寄り、カズコを人差し指で指して言い募る。

「まさか、私との縁談を断ってこんな小娘と結婚するつもりだったのかしら？それとも恋人のふりでも頼んだのかしら？」

そういって見知らぬ女は自分のハンドバッグから封筒を取り出すと、それをカズコの胸に押し付けた。

「手切れ金はこれでいいかしら？マサヒコさんにいくらで雇われたの？」

高慢にそう言い放つ女に、カズコの中でカッと何かが燃え上がった。

「いい加減にして！！私はマサヒコさんに雇われたわけじゃないし、恋人のフリを頼まれたわけじゃないわ」

「なら遊ばれていたのね」

「かもしれないわね」

「あら自分で認めるの？」

「それは違う」

嫌味たっぷりで言い返した女の言葉を打ち消す様にマサヒコが声を発した。

カズコを庇うように自分の傍に引き寄せ肩を抱き、マサヒコは見知

らぬ女にさらに続けて言う。

「僕は彼女を愛しているんだ。君には関係ないことだ。帰ってくれ」

「私に逆らうとどうなるかお解りかしら？」

「だらかどうだと言うんだ」

「あなたの社会的立場を、私奪うことができるのよ？」

「やりたければそうすればいい。だが、僕は君の言いなりにはならないよ」

「なんですって？」

「何度でも言おう。僕はあなたたちの言いなりにはならない。解雇するなり訴えるなり好きにすればいいさ」

驚きのあまり見知らぬ女は口をだらしなく開いて「え？」とか「へ？」と言うなんとも間抜けな声を出す。

カズコもマサヒコのまったく知らない一面を見て、マサヒコを見つめる。見つめた先のマサヒコは挑戦的な笑みを浮かべ見知らぬ女を睨んでいた。

やれるものならやってみろ、受けて立つ。そう全身で言い表しているのがひしひしと伝わってくる。肩に置かれているマサヒコの手は、力強くカズコを掴み安心感を与えてくれる。

その姿を見ていたら、自然とカズコも冷静になってきた。

「許さない。許さないわ、九条マサヒコ！！」

顔を真っ赤にして憤る女を見て、カズコは随分情緒の不安定な人だと思う反面、今にも本当にマサヒコを解雇しそうな勢いだとも思い一つの決断を下す。

「あーあ。なんだかガッカリ」

なるべく感情を表に出さないようにしたら、喉に余分な力が入って声が震えた。が、気にせずカズコは続ける。

「紳士的で優しくて、目一杯甘やかしてくれる素敵な人だと思ってたのになー」

頭の上で両手を組んで伸びをしながらマサヒコから離れる。気持ちを落ち着かせなければ、自分が本当に伝えたい思いが違う感情に飲み込まれてしまいそうだった。

「だから背伸びして可愛くて大人しくて従順な猫を被ってたのに」

「何を言ってるんだ？」

「だから、私が猫被ってたって話し。でも、お互い様だよね？」

小首をかしげてマサヒコを見つめる。するとマサヒコは今までカズコが見たことも無い華やかで魅力的な笑顔で頷いた。

マサヒコはカズコの言いたいこと、これからやろうとしていることに察しがついた。

お互いに猫を被っていたようだが、おそらく彼女は真面目で気が強くそしてしたたかなのだろう。長いこと人を視る仕事をしていたので、猫を被っていることは知っていたがお互い様だと思っていた。

籍を入れて同棲した後も仮面夫婦であろうがなんであろうが、彼女ならそれも可能だろうと直感した理由はこれかと思った。

実に好ましい。猫を被っていた彼女も可愛くて庇護欲をそそられる存在だったが、その下にある素顔の彼女も一人の女性として申し分ない。そして心の底から彼女が欲しいと思った。

「あぁ、そうだな。お互い様だ」

「今度はお互い、猫被りしなくて済む相手が良いと思わない？」

「そうだな」

「じゃぁ手切れ金代わりにこれは貰っておくわ。こちらが一方的に今日の被害を被ったのに何も収穫が無いのは悔しいし」
「ちょっと！！一体何なの！？」
ヒステリックになり始めた女の声が更にワントーン上がる。これ以上キーが上がったら金切り声になりそうな程だ。
「だから、猫被りのマサヒコさんとの別れ話です。見てわかりませんか？」
テーブルに置かれた黒い小箱を手に取りながら、さも馬鹿にしたようにカズコは女に言う。
その箱をバッグに仕舞って自分が持ってきた花束をマサヒコに押し付ける。
「じゃぁ、マサヒコさん、さよなら。次に合う時はお互い猫被りは無しにしてね」
「わかってるよ」
「それと、面倒ごとは早く片付けるべきね。彼女がかわいそうだから」
「努力するよ」
苦笑いしながらマサヒコは花束を受け取る。白いダリアとヒマワリのブーケ。それは今のカズコの心にぴったりだった。
花束を受け取ったマサヒコに満足すると、カズコはラウンジを出てホテルの出入り口へ真っ直ぐ向かう。
そういえば会計をしていない。とか、結構な野次馬が集まっていた。とか、しばらくこのホテルが使えない。とか色々と頭を駆け巡ったが、全てはどうでもいいと思った。

もし、自分の真意がマサヒコに伝わったのなら、必ず、もう一度マサヒコから連絡が来る。今はそう信じるしかなかった。

「タイムリミットはどうしようかなー」

ハイヤー乗り場に並んで順番を待つ。バッグから微かな振動音が聞こえた。
バッグを漁り携帯電話を探していると、事務所で貰った丸い缶に手があたった。ブーゲンビリアの描かれたストロベリーキャンディ。封を切って蓋を開けると鮮やかなピンクのキャンディがぎっしりと入っていた。甘酸っぱいいい香りに思わず一粒口に入れる。
口に広がる味は、香りと同じく甘酸っぱいイチゴの味だった。その味が口いっぱいに広がると、思わず涙がこみ上げた。
かろうじて睫毛に引っかかって落ちることの無い涙を引っ込めるべく、彼女はパールピンクの携帯電話を開く。
そこにはホノミからのメールが受信されていた。

『今夜ユイの実家で飲み会実施。独りがいやならこっちにおいで』

受信した時間は２０時４３分だった。現在時刻は２１時２７分。
思えばあれはたったの２０分足らずの出来事だったのだ。そう実感すると、引っ込みかけていた涙がまたこみ上げる。
慌てたカズコはメールの返信を打つ。

『今からそっちに合流する。まだ帰らないでね』

文末にハートマークの絵文字を付けながらふと思う。そういえば、マサヒコには絵文字など付けたこともなかった。
もし、もう一度マサヒコから連絡が来るようなことがあったら、今度はメールをしてみよう。ハートマーク付きで。

自分の考えがいかに甘くて図々しいかわかってはいたが、まだ諦めたくないのも事実で。
もう少しだけ、この甘酸っぱい想いを抱いていてもいいかな。と思う。せめて、このブーゲンビリアの描かれたキャンディがなくなるまでは…。

▼スイートストロベリー▼（後書き）

いかがでしたでしょうか？
とりあえず一度カズコのお話は終了です。最後まで読んでいただき
ありがとうございました。
柳　すすたけ：拝

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5904t/

ironical pink

2011年6月4日07時07分発行